

<p>所属名</p> <p>教育相談センター</p>	<p>研究会議名</p> <p>学校教育相談研究会議</p>
<p>研究主題</p>	<p>自己理解を深め、課題解決に向かう子を育む実践研究 ～不登校の未然防止・登校支援に向けた教育相談的な関わりを探る～</p>
<p>資質・能力 育成を目指す</p>	<p>他者との関わりの中で、自己理解を深め課題解決ができるような 資質・能力等の育成を目指す</p>
<p>研究内容</p>	<p>文部科学省の「令和元年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」によると、全国小・中学校の児童生徒の不登校児童生徒数は、175,424人（公立学校）と過去最多であることを示した。小・中学校の在籍児童生徒数が減少しているにも関わらず、不登校児童生徒数は7年連続で増加し続けている。川崎市においても、小学校が700人、中学校が1,389人と全国と同様過去最多を示した。</p> <p>令和元年度、本研究会議の先行研究では、川崎市における不登校の「きっかけ」「背景」及び「支援」に視点を置いてアンケート調査を行った。この調査から、「学習」「友人関係」をきっかけに不登校になった児童生徒の背景として、「不安・緊張が高い」「無気力」と相関関係にあることが分かり、学校生活において様々な課題と向き合う中で不安やストレスが生まれ、登校しぶりや不登校に繋がっているという視点が得られた。</p> <p>このことから、どの児童生徒においても学校生活の中で不安やストレスを抱く場面は訪れるが、不安やストレスによって落ち込んでしまった気持ちを回復する力であるレジリエンスが不登校の未然防止・登校支援の大きなポイントになると考えた。レジリエンスの要因には、楽観性や社交性等の生まれもった資質と関連する資質的要因と、発達の中で身に付いていきやすい獲得的要因（①自己理解、②他者心理の理解、③問題解決志向）が挙げられる。後者の獲得的要因については学校教育が大きく関係していると考え、教師が獲得的要因を意識して授業や日頃の関わりを行うことで、児童生徒のレジリエンスが高まり課題解決に向かうことができると思う。</p> <p>そこで本研究会議では、児童生徒の実態の把握を基に、学級活動やかわさき共生＊共育プログラム等これまで行ってきた教育活動についてレジリエンスの視点を意識して実践し、指導や支援の在り方を検証する。実践の中で、1人1台端末においても、新たな教育相談的な関わりの手立ての一つとして活用する方法について考えていく。この研究を通して、児童生徒が関わりの中で自己理解を深め課題解決ができるような資質・能力等の育成を目指すものにした。</p>